

2006年6月14日

株式会社三井住友銀行 頭取
奥 正之 様

DOCOMOMO Jpan 代表
鈴木博之

旧・日本相互銀行本店の保存に関する要望書

拝啓 時下益々ご清祥のこととお慶び申し上げます。

本会は、20世紀の建築遺産の価値を認め、その保存を提唱することを目的のひとつとする国際的な非政府組織（NGO）である DOCOMOMO の日本支部です。

東京都中央区に所在する貴社所有の建物である「旧・日本相互銀行本店」につきまして、竣工した時点において、1952年度の日本建築学会賞を受賞した著名な建築です。また、近年においては、すでに本会代表と日本建築学会長の連名でご通知申し上げますが、2003年、日本建築学会の歴史・意匠委員会の下に組織された選定委員会によって、日本を代表する近代建築100選のひとつにも選定されております。その後、本会が主催者となって開催した展覧会、「文化遺産としてのモダニズム建築—DOCOMOMO100選展」（2005年3月12日～5月8日、松下電工汐留ミュージアム）でも、広く建築内外に紹介させていただきました。さらに、設計者の建築家・前川國男の回顧展である「生誕100年・前川國男建築展」（2005年12月23日～3月5日、東京ステーションギャラリー・現在巡回中）でも、戦後の代表作品として展示され、関連して制作・放映されたNHKの特集番組「もうだまっていられない—建築家前川國男の闘い」（2006年4月1日放送）の中でも大きく取り上げられました。

こうした中、その建築的な価値については、十分にご承知のことと拝察申し上げますが、改めて本建築に備わる歴史的な価値についてご理解をいただき、今後、その価値の保存について、慎重にご検討下さいますよう要望申し上げます次第です。

この建物の歴史的価値は、次のようにまとめることができます。

1. 前川國男の設計による代表作品であること

前川國男（1905～1986年）は、戦前にフランスへと渡り、20世紀を代表する世界的な建築家であるル・コルビュジェ（1887～1965年）に学び、帰国後、亡くなるまでの半世紀の長きに渡って、戦前戦後の日本の建築界をリードした建築家です。

貴建物は、まだ本格的な建築がほとんどつくれなかった戦後の復興期に、日本の新建築の進むべき方向を示そうという、前川の高い志に支えられてつくられたものです。彼は、

近代技術を積極的に活用した新しい建築をめざし、率先してその方法を開発しようとした。このような彼の考え方は、「テクニカル・アプローチ」と呼ばれました。貴建物では、徹底した軽量化を図るために、2階までを鉄骨鉄筋コンクリート造、3階から9階までを全溶接の鉄骨造にし、外壁にはアルミサッシュと軽量のコンクリートパネルを採用しました。鉄骨の全溶接やアルミサッシュの採用は日本最初であり、それらによって、1階の大スパンの大きな営業室や、軽快でモダンな外観をつくりだしました。積極的に革新的な技術を適用した意味からも、「テクニカル・アプローチ」の最初の本格的な実践例として、ひいては、近代建築史上、また、建築技術史上において、特筆すべき建物です。

2. 東京駅周辺における都市景観を代表する建築であること

本建築は、また、空襲によって焦土と化した東京にあって、長く東京駅周辺の都市景観を形成してきた建物でもあります。現在、周囲で進められている大規模な都市再開発によって、次々に戦後の町並みを形成してきた建物が姿を消していく中で、呉服橋交差点の風景を形作る本建築は、そうした都市景観的な観点からも、貴重な建築遺産となっています。

3. 建築作品としての価値

日本の近代建築は、戦争による長い空白期を経て、1950年にすべての資材制限が解除され、ようやくそのスタートラインにつくことができました。そうした中、いまだ未熟な状態だった建築技術を近代化し、地震国であるという障害を乗り越えて建物の構造を合理化し、建物を軽量化することは、貧しい日本にとって最大の目標でもありました。本建築は、そうした時代の要請にいち早く応えるべく、徹底した工業化と軽量化に挑んだ先駆的な建物でした。当時はまだ高価だった特注のアルミ・サッシュによる正面の外観、広く開放的な1階の営業室、間仕切りの自由な変更が可能な事務スペースなど、その後の建築に大きく展開されていく建設技術や工業化材料のほとんどが、この建物で試みられています。そうした意味からも、DOCOMOMOの選定建築物のみならず、日本の近代建築の中で独自の存在価値をもっていると言えます。

以上のことから、本建築は、さまざまな価値を有する貴重な建築文化遺産と考えられます。つきましては、今後も、そこに込められた設計思想をご理解いただき、良好な状態での保存活用の方途を見出し、このかけがえのない建物を後世へと継承されますよう、格別のご配慮を賜りたく、関係資料を添えて、ここにお願い申し上げます。最後に、もし求められましたら、本会としても、この建物の保存活用について、建築の専門家という立場から、助言させていただく用意のあることを申し添えます。

敬具